玖珂町埋蔵文化財調査報告　第４集

臼田古墳

２００１

玖珂町教育委員会

玖珂町埋蔵文化財調査報告　第４集

臼田古墳

（うすだ）

２００１

玖珂町教育委員会

序

玖珂町臼田地内の臼田古墳は、６～７世紀の古墳時代後期に属する横穴式石室墳として古くから知られておりました。このたび本古墳の保存を図る目的で基礎資料を得るため、山口県埋蔵文化財センターに調査をお願いし、平成12年２月21日から２週間余りをかけ発掘調査を実施していただきました。

この発掘調査により、山口県内で発掘調査された古墳の中でも、有数の大型横穴式石室墳であることが判明し、また出土した供献土器や副葬品等とともに、玖珂町の古代史を解明する上での貴重な資料の一つとなることと思います。

さらに、本古墳の発掘調査を機に、今後ますます文化財に対する認識が高まり、本書が教育・学術研究、文化の振興のために広く活用されるように願っております。

今回の発掘調査にあたり、業務多端な折りにも関わらず日程を割いて調査を行っていただきました山口県埋蔵文化財センターの先生方、並びに御協力を賜りました地元関係者の皆様方に、深甚なる敬意と感謝を申し上げます。

平成13年３月

玖珂町教育委員会
教育長　柳　川　堅　一

例　　言

1　本書は、山口県玖珂郡玖珂町字臼田に所在する臼田古墳の発掘調査報告書である。
2　調査組織は次のとおりである。
　調査主体　玖珂町教育委員会
　調査担当　財団法人山口県教育財団　山口県埋蔵文化財センター
　　事業課長　　乗　安　和二三
　　指導主事　　大　村　秀　典
　　調査研究員　　小　南　裕　一
3　本書の作成にあたり、出土した人骨の鑑定を土井ケ浜遺跡・人類学ミュージアム館長松下孝幸氏に依頼し玉稿を得た。記して謝意を表する。
4　本書に掲載した第１図の地形図は、建設省国土地理院発行の50000分の１の地形図「岩国」を、第２図の地形図は、玖珂町提供の「玖珂町地形図No.１」を、ともに複製したものである。
5　本書に使用した方位は国土座標（第３座標系）の北で示し、標高は海抜標高である。
6　本書に使用した土色の色調の標記は、Munsell方式による。（農林省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』）
7　本書の作成・執筆は、大村（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ）・小南（Ⅴ）が分担し、大村が編集した。

本　文　目　次

Ⅰ　遺跡の位置と環境……1
Ⅱ　調査に至る経緯と調査の概要……2
Ⅲ　墳　丘……5
Ⅳ　石　室……5
　１．掘り方……6
　２．玄　室……6
　３．羨道と閉塞施設……8
　４．玄室内石列……8
Ⅴ　遺　物……8
　１．土　器……8
　２．鉄製品……10
Ⅵ　まとめ……11
付編　山口県玖珂町臼田古墳出土の人骨……12

図　版　目　次

図版１　臼田古墳遠景（西より）
　　調査前（南より）
図版２　調査前近景（南より）
　　調査前近景（東より）
図版３　調査前近景（西より）
　　トレンチ配置状況（北より）
図版４　東トレンチ石室掘り方検出状況（北より）
　　東トレンチ周溝部土層断面（北より）
図版５　北西トレンチ墳丘裾部検出状況（西より）
　　北トレンチ石室掘り方検出状況（北より）
図版６　玄室奥壁
　　玄室右壁
図版７　玄室左壁
　　玄門部
図版８　羨道閉塞検出状況（西より）
　　玄室内石列（奥壁側より）
図版９　出土遺物

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡……1
第２図　臼田古墳の位置と周辺地形……3
第３図　地形測量図とトレンチ設定図……4
第４図　西トレンチ土層断面図……5
第５図　東トレンチ土層断面図……5
第６図　北トレンチ土層断面図……5
第７図　北西トレンチ土層断面図……5
第８図　石室平面図……6
第９図　石室実測図……7
第10図　出土遺物実測図（1）……9
第11図　出土遺物実測図（2）……10

表　目　次

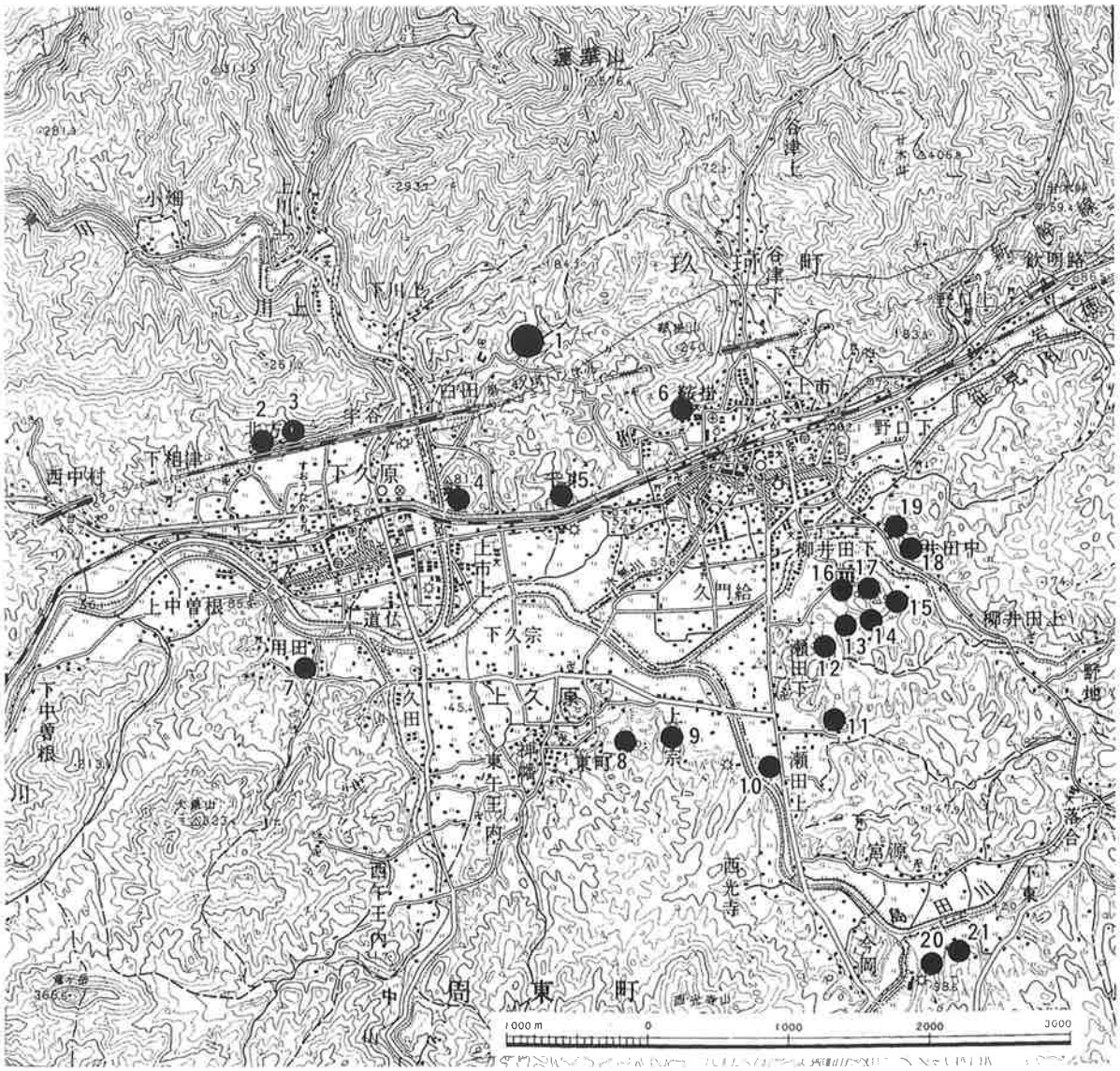
第１表　出土土器観察表……9
第２表　出土鉄鏃計測表……10

Ⅰ　遺跡の位置と環境

臼田古墳は、玖珂郡玖珂町字臼田に所在する古墳時代後期の古墳である。

山陽自動車道を下松方面から東に進み、熊毛ＩＣを過ぎ10分もすると、北側の山の切れ間に大きく開けた盆地が広がるのが目に入る。山口県東部を代表する玖珂盆地がそれで、島田川上流に開けた中央部の低地は、盆地を南東から北西方向に蛇行しながら横断する島田川とその支流である水無川が形成した、県内を代表する典型的な扇状地である。この玖珂盆地は地形的には一つの盆地でありながら、旧毛利藩の時代から行政的には東側の玖珂町と西側の周東町の二つの町に分かれている。その中で、臼田地区は玖珂町の西端にあたり、生活の関わりとしては周東町の高森により近いといえよう。

臼田古墳は町の北西端に聳える蓮華山（576.4m）の南西裾部に位置し、標高約110mを頂部としてほぼ南に張り出す丘陵端（標高75m前後）に築かれていた。古墳の前面には、北東から南西に流れる臼田川が開析した細長い谷が延びる。古墳が谷の奥まったところにあるため、古墳最頂部の標高は



1.臼田古墳　2.北方古墳　3.大元古墳　4.筏山遺跡　5.千束遺跡　6.植山遺跡　7.用田遺跡　8.河池遺跡
9.上久宗遺跡　10.瀬田城跡　11.瀬田古墳　12.畑岡遺跡　13.上殿古墳　14.清水古墳　15.柳井田遺跡
16.大田遺跡　17.清水遺跡　18.樋面古墳　19.へころがき古墳　20.四割遺跡　21.奥ケ原遺跡

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

77.6mと盆地の中央部の低地より30m程度高いにも関わらず、眺望は全く開けていない。これは、同じく盆地北縁に築かれている周東町の北方古墳（臼田古墳の西1.7㎞、標高約65m）が、低地との比高差が20mながら周東町高森地区を一望できるのとは極めて対照的である。

玖珂盆地周辺には、古くから島田川上流域遺跡群として知られる縄文～古墳時代の遺跡が数多く存在する。盆地南西隅の用田遺跡は、縄文土器片の他に、県内では発見例に乏しい縄文草創期の有舌尖頭器が出土し、東対岸の河池遺跡でも早期と晩期の縄文土器片が発見されている。

弥生時代になると、前期末の甕が出土した高森高校地内の筏山遺跡を始めに、中期の標識土器となる壺が発見された柳井田遺跡、同じく中期の集落跡が発見された前述の河池遺跡が知られ、後期になると柳井田遺跡の後背の丘陵に位置する清水遺跡や、その南西に隣接する畑岡遺跡が弥生時代後期後半の高地性集落として著名である。

古墳時代としては、弥生時代の遺構の上に築かれた竪穴式石室を主体部とする筏山古墳や、畑岡遺跡のある丘陵北斜面で発見された上殿古墳が前期の古墳として知られるが、他はほとんどが盆地縁辺に築かれた後期から終末期の古墳である。ただし、その多くは残存状況が悪く、石室形態等が明らかでないものが多い。その中で周東町の北方古墳は、石室の基底部しか残存していないものの平面規模としては比較的大きな両袖の横穴式石室で、須恵器や馬具、鉄鏃など豊富な副葬品が出土した。石室形態や規模から見て、今回調査した臼田古墳と類似しているという点で注目される古墳である。

参考文献
玖珂町　『玖珂町史』　1972
山口県教育委員会　『山口県文化財概要第4集』　1961
山口県教育委員会　『清水遺跡』　1989　ほか山陽自動車道建設に伴う一連の島田川上流域遺跡群の調査報告

Ⅱ　調査に至る経緯と調査の概要

臼田古墳は、玖珂町内では数少なくなってしまった主体部の姿を比較的よく残す古墳として、古くから地域の人々に周知の古墳であった。地元の人の話では、昭和初期頃までは墳丘の大部分も残存していたようだが、その後、墳丘が雨によって流出したり、周囲の畑の耕土して削り取られたりしただけでなく、石室自体も雨風による風化等により前壁や羨道部の一部が崩落するという状況であった。そのため、このまま放置すれば石室の中心部も崩壊するおそれが生じ、安全上だけでなく、地域に残る貴重な文化財を保護するという立場からも、保存のための対策が急がれることとなった。

そこで、平成10年度に玖珂町は、今後の古墳の保存と史跡としての整備を前提として、必要な資料を得るための最小限度の調査をすることとなり、財団法人山口県教育財団に発掘調査の技術援助を依頼することとなった。調査は平成11年度に行うこととなり、平成12年１月11日の最終協議の結果、調査期間を2週間程度として、平成12年２月21日から発掘調査に入ることに決定した。

平成12年２月18日に発掘器材が搬送され、予定通り２月21日から発掘調査に入った。

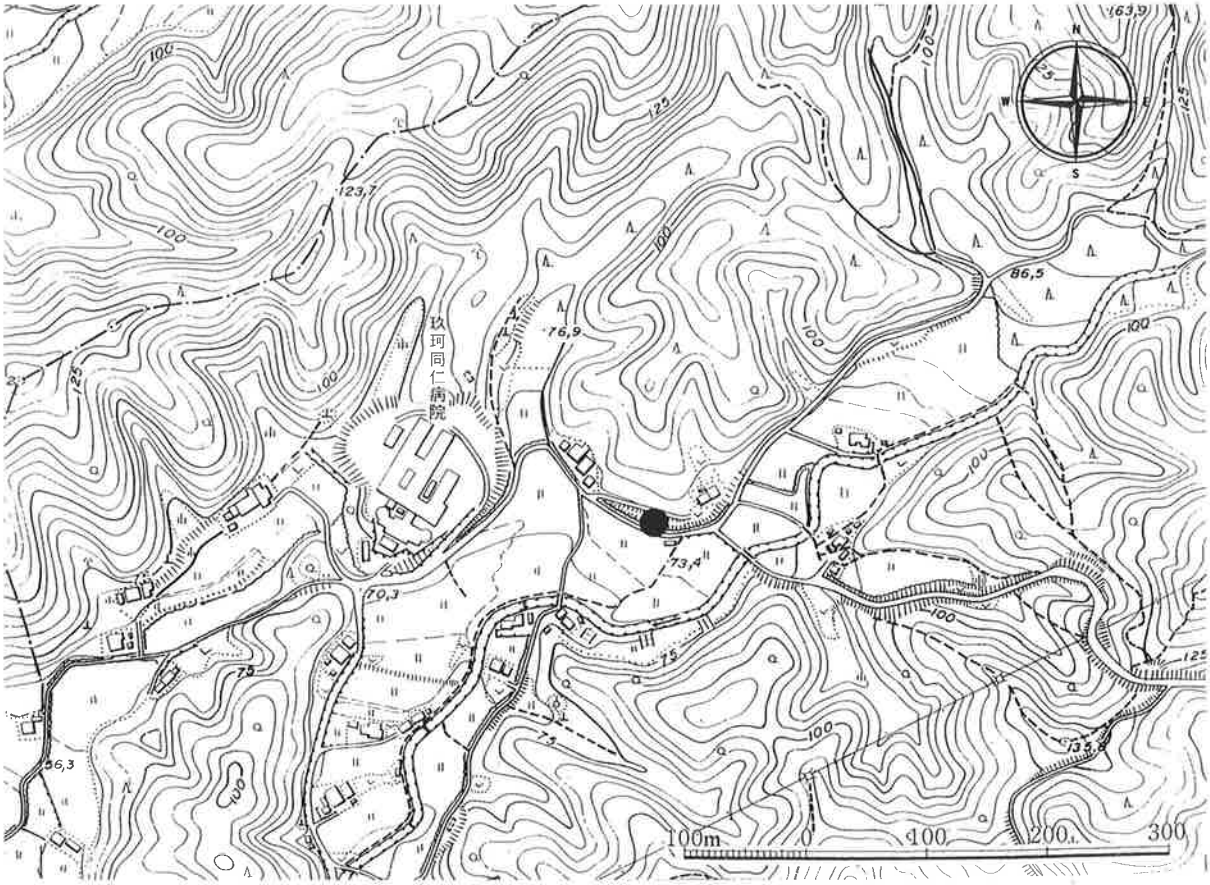
まず当日午前９時より、玖珂町助役及び町教育委員会教育長立ち会いのもと、町教育委員会関係者、山口県埋蔵文化財センターの調査員並びに発掘調査に参加する地元の作業員が参加して、発掘調査の無事終了を願い安全祈願を行った。安全祈願終了後、ほぼ南東から北西となる石室主軸を決定し、それをもとに墳丘と周溝確認のためのトレンチを設定した。トレンチは、墳丘規模が10m前後の円墳という想定のもとに、東西方向はそれぞれ５mの長さとしたが、南側はコンクリートの階段と町道に

なっているため設定せず、北側も奥壁から古墳後背の比高差3.5m近くの急崖の下端との距離が短く、相当の削平が予想されたため長さも２ｍと短く設定せざるを得なかった。

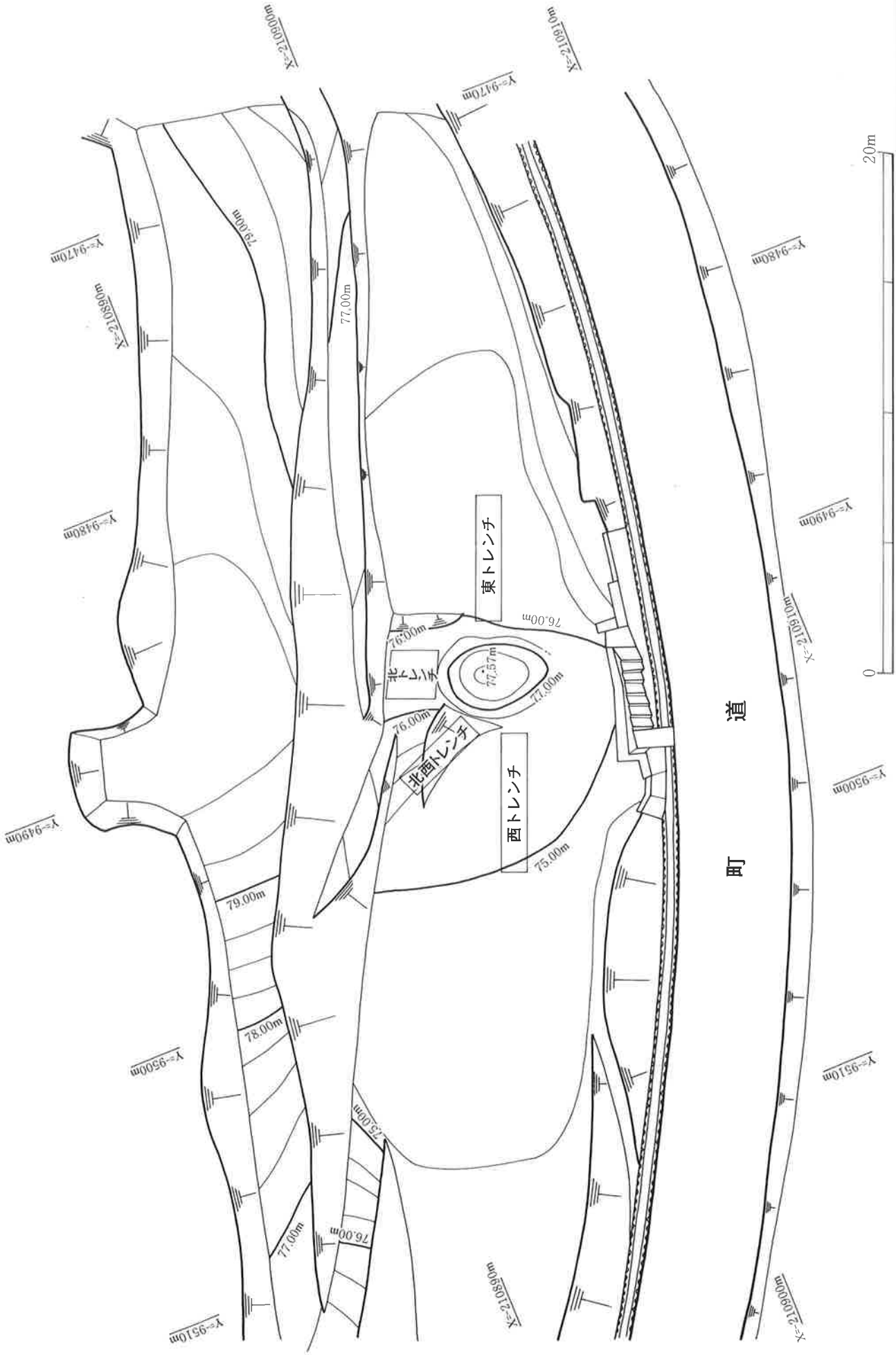
初日は、まず東トレンチより掘り込みを開始し、石室中心部から４～５ｍの位置に周溝らしきものが確認できたが確定するには至らなかった。翌２日目は、西トレンチと北トレンチの掘り込みも開始。前日同様、並行して地形測量も継続した。３本のトレンチ掘り込みの結果、それぞれ石室掘り方は確認できたものの、周溝の箇所については十分な根拠が得られなかった。そのため、３日目には北西方向にも長さ3.3mの補助トレンチを設定。その結果、石室中心から4.4mの地点で地山の削り出しを検出し、東トレンチで得られた成果と合わせて、墳丘径をほぼ確定するに至った。その日は、石室内も掘り込みを開始。土器片の他に鉄製品を検出するとともに、同日中に玄室床面も確認した。

調査開始から４日目となった24日には、玄門部から羨道部にかけての崩落石を業者の手を借りて除去。その際、当初は崩落石と見なしていた玄門部左側の石が、袖石であることが判明し、主体部は両袖式の横穴式石室であることが明らかになった。崩落石除去後、玄門部から羨道部の掘り込みを行い、羨道部に閉塞石を確認し、同時に羨道部の側壁も検出した。結局、28日には石室を完掘し、引き続いて石室内埋土の遺物精査を開始。なお、同日中に、北トレンチの石室掘り方を切っていた不明遺構を完全に検出するためトレンチを拡張した結果、それが近世以降の水溜であることも判明した。

掘り込みを終えて、いよいよ３月１日から石室実測を開始。天井石の残る比較的大きな石室のため、実測には３月７日まで当初の予想を超える５日間を要した。そして、最終日の８日には一部残っていた地形測量も完了。完掘写真、遠景写真を撮り終わって合計13日間にわたった調査は無事終了した。



第２図　臼田古墳の位置と周辺地形

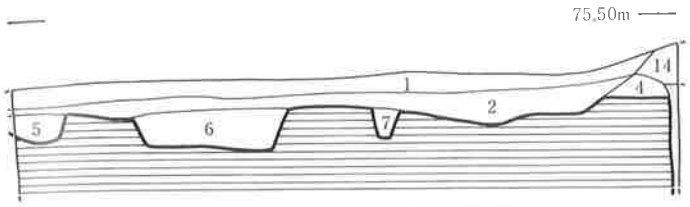


第3図　地形測量図とトレンチ設定図

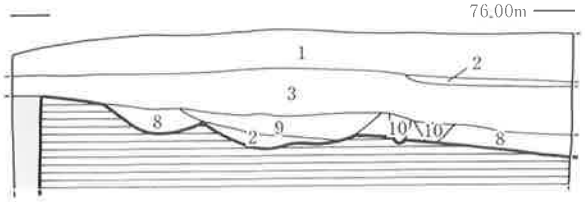
Ⅲ　墳　　丘

古墳は、北から南に張り出す丘陵端に築かれているが、丘陵自体の比高差は約40mもあり、丘陵の長さも短いことから、本来の地形は相当傾斜していたことが推定される。従って、古墳築造時の地山整形として、最初に北側の斜面上位側をかなりカットしたことは想像に難くない。その根拠の一つとして、東トレンチの土層観察で、幅1.6m、最も深い所で深さ30㎝程度を確認した周溝は、その底部こそ花崗岩の風化土を含むにぶい黄橙色砂質土の地山まで掘り込まれていたものの、地山の上層には、東西方向どちらとも黄灰色砂質土が確認されたことがあげられる。この層は、弥生土器片を含んでおり、周溝はこの遺物包含層から掘り込まれていた。以上のことは、墳丘の基底面を造り出すときに、斜面上位側をカットした際の土を用いて下位側を整地したことを暗示するものである。

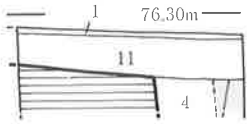
一方、現地形においては東より１m程度標高が低い西側の平坦面では、東トレンチで確認できた整地土は、石室掘り方近くで確認できた以外認められなかった。これは、地表面から地山面までの深さが、東トレンチは40～100㎝と東へ行くほど深かったのに対し、西は最深部でも40㎝余りと浅かったことから、西側の方が後世の削平を受けやすかったためであろう。従って、西トレンチの土層観察では、地山まで掘り込まれた柱穴状の遺構と土坑状の遺構は確認できたものの、肝心の周溝については確定するまでには至らなかった。



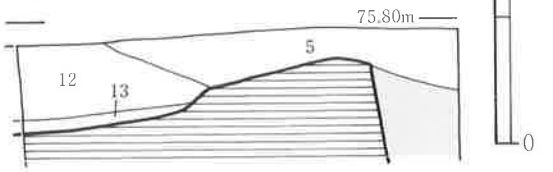
第４図　西トレンチ土層断面図



第５図　東トレンチ土層断面図



第６図　北トレンチ土層断面図



第７図　北西トレンチ土層断面図

そこで、当初設定した３本のトレンチに加えて、北西方向に補助トレンチを設定した。すると、石室中心から4.4mの地点で、地山を削りだした箇所を確認でき、さらにその北西側には、最下層に周溝の堆積土と推定される褐灰色砂質土が観察されたことから、地山削り出しの最低部が古墳の墳丘裾部であると確信するに至った。これは、東トレンチで確認した周溝の位置とも対応している。以上のことから、もともとの墳丘は、直径９m程度の円墳であったものと思われるが、墳丘封土については、かろうじて石室全体を覆う程度でほとんど残存しておらず、西トレンチの石室掘り方近くでわずかに１層確認できただけである。

土　層　凡　例

1 表土	8 黄灰色砂質土（整地土・遺物包含層）
2 灰黄色砂質土（遺物包含層）	9 褐灰色砂質土（遺物包含層）
3 暗灰黄色砂質土（遺物包含層）	10 灰色砂質土
4 褐灰色砂質土（整地土）	11 灰黄褐色砂質土
5 黄灰色砂質土	12 浅黄色砂質土
6 灰黄色砂質土	13 褐灰色砂質土
7 黄褐色砂質土	14 灰黄褐色砂質土（墳丘封土）

Ⅳ　石　　室

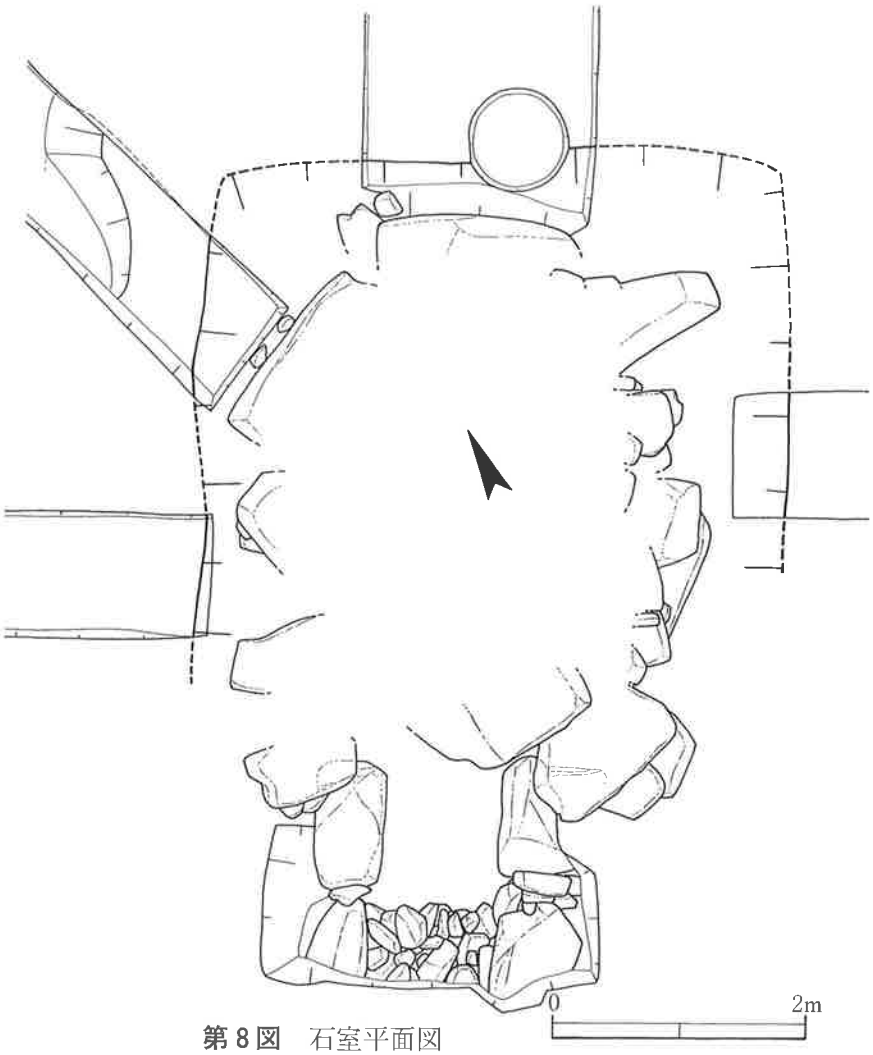
玄室の両側壁と奥壁及び天井石の残存度は良好だが、玄室の前壁、楣石、羨道部側壁の一部と天井

石は既に失われていた。一方、調査前は、玄門部に4石の大振りな石が崩落を思わせる状態で露呈しており、しっかり残っていた右袖石を見る限り片袖の横穴式石室であろうと考えられた。しかし、崩落石を除去する段階で、４石のうち、玄室左壁寄りの石の3/4は、石室に流入した土に埋まっていることが判明。右袖石とは位置的にややずれるものの、左の袖石であることが分かり、結果的に両袖単室の横穴式石室であることが確認できた。検出した石室の全長は5.9mだが、同じ玖珂盆地の北縁に近接する北方古墳とは玄室の平面規模が極めて近く、当古墳の石室長も7.5m前後と見てよかろう。石室は等高線に直交するかたちで構築されており、開口方向はほぼ南西である。石材は、詰め石の川原石を除いて、近くの丘陵にも岩盤が露呈している花崗岩が用いられていた。

１．掘り方

トレンチの土層観察によって確認された掘り方は、東西方向の横幅は約4.7mを確認できたものの、南側がコンクリートの階段に攪乱されているため全長は不明である。なお、４本のトレンチで得られた掘り方ラインから推定して、平面形は隅丸方形と思われる。

玄室中央部の標高を基準にすると、検出した掘り方の深さは、地山から掘り込まれていた奥壁側は1.7m、同じく地山から掘り込まれていた右壁側は1.3m、整地土と思われる層から掘り込まれていた左壁側は0.9mを測った。左壁側はやや削平されていると見て、比較的深めの掘り方である。なお、掘り方内の石室裏込めの土は、東西トレンチの土層観察では総体的に地山の土と土色が近似しており、土色の違いから判断できる版築らしい層序はほとんど見られなかった。しかし、土自体は非常に固く締められていたことから、地山を削った土をたたき締めながら裏込めとしたことが推定される。

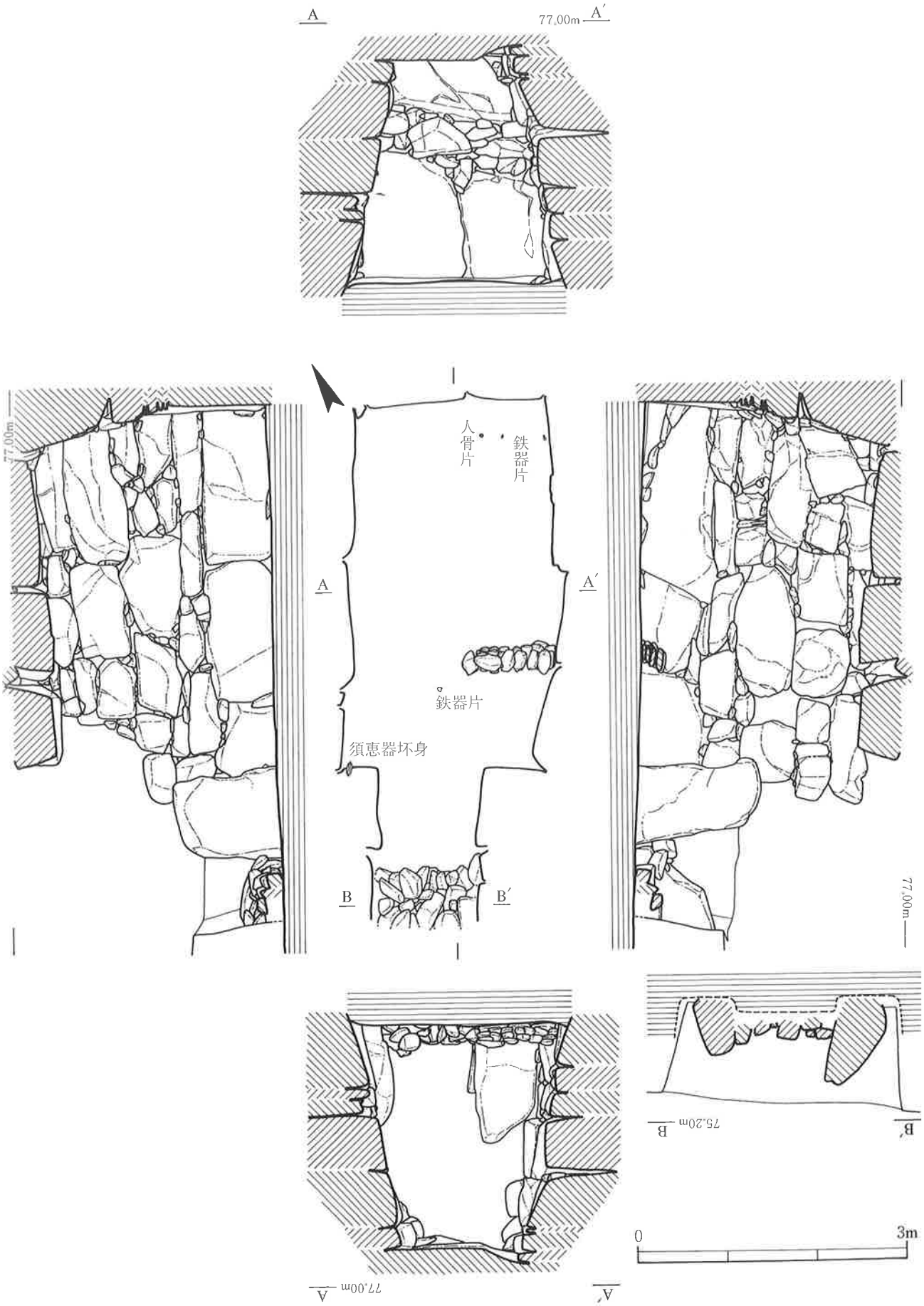


第８図　石室平面図

２．玄室

奥幅2.14m、中央部幅2.30m、前幅2.14m、左壁長3.90m、右壁長4.14mを測る。計測値において胴張りの平面プランを思わせるのは、左壁側はほぼ直線を呈するのに、右壁側は中央部でくの字に曲がることに理由があり、実際には、長さと幅がほぼ２：１の縦長の長方形プランである。一方、玄門から奥壁側を見た断面は、両側壁が直線的に持ち送られているため、見事な台形となっている。

奥壁は、２枚の大型の石を並べて基部石とする。２つの基部石の上には、大小雑多な石を３～４段


A
A′
77.00m
B
B′
77.00m
77.00m
人骨片
鉄器片
鉄器片
須恵器坏身
A
A′
77.00m
B
B′
75.20m
0
3m

第9図　石室実測図

程度、横目地を意識することなく積み上げ、ある程度の高さを確保した後、最上段にはこれも比較的大型の台形の石を乗せ、天井石の支えとしている。一方、両側壁は、奥壁側を一番長めにして、それぞれ３石の石を石室主軸に並行に縦長に据え基部石とする。基部石とその上に載る２段目の段階では、左右とも比較的横目地が揃うが、それより上は石の大きさもまちまちで、至る所に川原石を用いた詰め石で安定を図っている。両側壁とも、天井に向かって直線的に石を持ち送り、積み上げられた石は、左壁、右壁とも平均すると５段、床面から天井石までの高さは、奥壁側で2.7m、玄門側で2.4mを測る。なお、玄門側に向かってわずかに傾斜する天井石は、大型で分厚い３枚の板石を使用している。

楣石が欠失する玄門部は両袖で、床面からの高さは、左袖が1.2m、右袖が1.4mを測る。おそらく楣石との間にもう一石入れて高さを揃えたものであろう。この両袖石は、上側から見るとかなり位置がずれた印象を受けるが、床面近くでは見た目以上に内側の面は揃っている。袖石間に框石は検出できなかったが、床面がしっかりしていることから、当初から框石はなかったものと見られる。

玄室床面には敷石はなく、砂などが敷かれた形跡もなかった。床面は、奥壁側から羨道部に向かって緩やかに傾斜しており、その比高差は約20㎝。石室内の排水性を高める目的であろう。

３．羨道と閉塞施設

石室前面に、袖石に続く羨道部の側壁を左右１石ずつ検出したが、南側はコンクリートの階段で攪乱されていた。従って羨道部の全長は不明であるが、北方古墳を参考にすると、３m以上の長さが推定される。この羨道部では、床面近くで閉塞施設が確認できた。大小さまざまな塊石を両羨道側壁間を塞ぐかたちで雑多に積み上げているが、両側壁の高さと残存する閉塞施設最上部のレベルから見て、上部の大部分は石をとられたものと見られる。

４．玄室内石列

玄室中央部から60㎝程度玄門側に、玄室主軸と直交して右壁から玄室主軸線までの間に、３～４段の石列を長さ１m余りにわたって１列検出した。１段目には厚さ４～５㎝、幅15㎝程度、長さ30㎝余りの３枚の板石を横長に並べ据え、その上に２～３段、１段目よりやや小さめの塊石を、縦長に載せる。石列の面は、玄室中央側がほぼ揃っており、底面は玄室床面と完全に接していた。

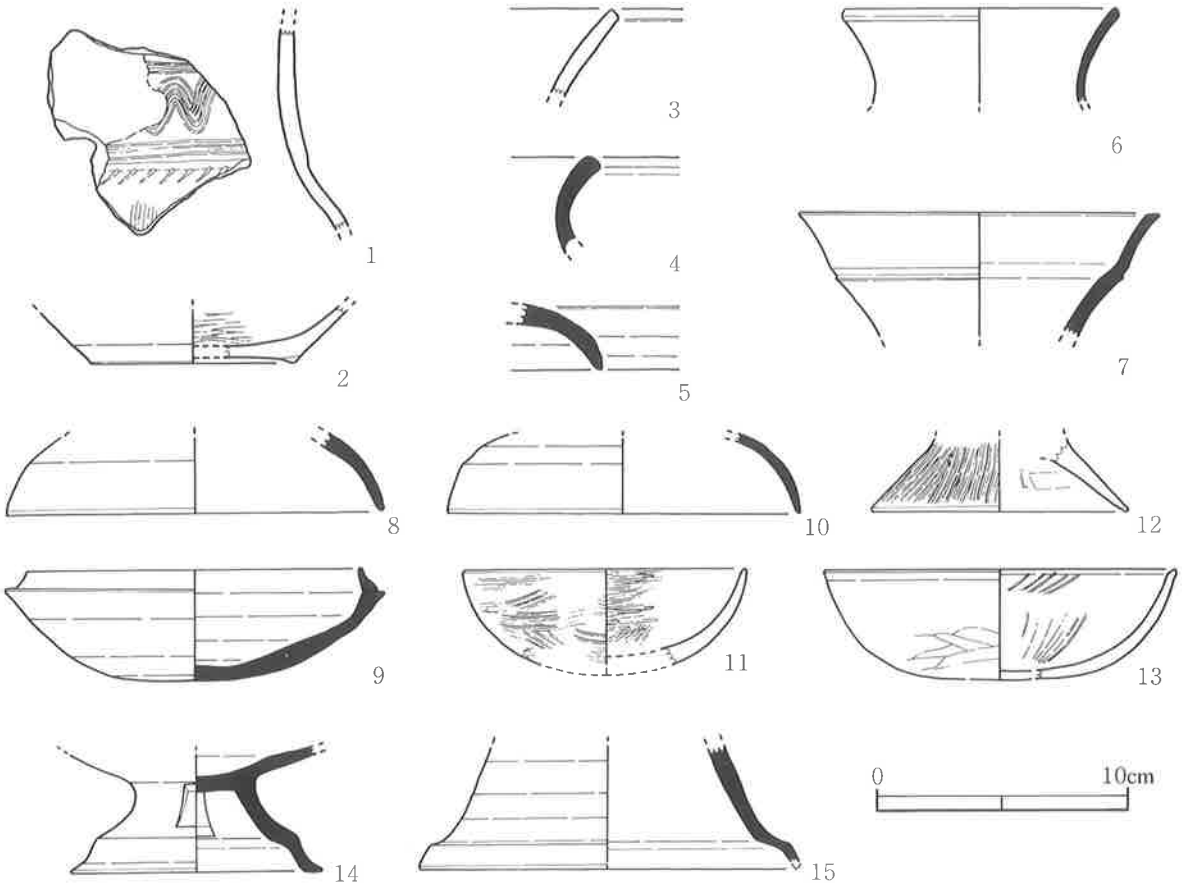
この石列は、玄室構築時の遺構である可能性が高く、玄室内を何らかの目的で区切ったものと見られる。石列の面を見る限り、玄門側に土を入れて棚状にした可能性もあるが、玄室掘り込みの際の土層観察では、明確な土の違いは観察できておらず想像の域を出ない。

Ⅴ　遺　物

東トレンチから弥生土器、土師器、側壁裏込めから土師器、玄室内から須恵器、鉄製品、人骨片、玄門部から須恵器、土師器、鉄製品が出土した。玄室内と玄門部の遺物は各所に散在して検出されたことから原位置を留めるものは少ない。玄室内埋土については、全てふるいにかけ精査したが玉類などの装身具は１点も発見できなかった。相当早い段階で盗掘を受けたものと思われる。

１．土器

１～３は東トレンチ並びに側壁裏込めから出土。１は弥生土器の壺で頸部が直立気味に立ち上がる。頸部には櫛描による直線文の間に波状文を施す。２は土師器椀。底部には三角形の小さい高台を貼り



第10図　出土遺物実測図（1）

付けており、体部は直線的に立ち上がる。内面は黒色で磨かれ、いわゆる「黒色土器A類」の範疇でとらえうるものである。3は土師器の壺もしくは甕の口縁部で、薄手のしっかりした作りである。

4～15は石室内から出土。4・6は須恵器壺の口縁部でいずれも口縁外端部を若干肥厚させる。7は須恵器甕の口縁部である。頸部が強くしまる形態を呈すると考えられ、口唇部は平坦に仕上げる。5・8・10は須恵器坏蓋でいずれも天井部を欠失する。5は小片のため不明な点が多いが、低い器高のものであると考えられる。8・10は口唇部を尖り気味に仕上げる。10は非常に薄手の作りで、蓋としてはやや特異なものである。9は須恵器坏身。玄門の左壁に貼り付くようにして出土した。受部は短く、口縁部は内傾しながら短く立ち上がる。焼成が不良で全体的に白っぽい色調である。11・13は土師器坏。11は底部から内湾気味に立ち上がる形態を呈し、口唇部は尖り気味に仕上げる。13は平底に近い底部から内湾気味に立ち上がり、口縁端部は若干外反する。外面底部はヘラケズリ。内面に放射状の暗文を2段に施し、畿内系の土器とみられる。12は土師器高坏の脚部と考えられ、裾部にむ

第1表　出土土器観察表　（単位はcm）

挿図図版番号	器種	出土地点	法量			手法の特徴		胎土	焼成	色調	備考
			底径	口径	器高	内面	外面				
1	弥生土器壺	東トレンチ	—	—	—	ナデ	ハケ	砂粒多	やや不良	黄橙色	頸部に櫛描波状文を施す
2	土師器椀	東トレンチ	(8.0)	(2.1)	—	ミガキ	ロクロナデ	砂粒多	良好	にぶい橙色	黒色土器
3	土師器壺？	側壁裏込	—	—	—	ナデ	ナデ	砂粒多	普通	橙色	
4	須恵器壺？	玄室	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良好	灰白色	
5	須恵器坏蓋	玄室	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良好	灰色	
6	須恵器壺	玄室	—	(11.0)	(3.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	密	普通	灰黄色	
7	須恵器甕	玄室	—	(14.2)	(5.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良好	灰色	
8	須恵器坏蓋	玄室	—	(15.0)	(3.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良好	灰色	
9	須恵器坏身	玄門	—	(13.2)	(4.4)	ロクロナデ	ロクロナデ 底部回転ヘラケズリ	密	不良	灰白色	
10	須恵器坏蓋	玄門	—	(15.0)	(3.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒多	やや不良	灰黄色	
11	土師器坏	玄門	—	(11.2)	(3.8)	撫痕ヘラナデ	ハケ後ナデ	砂粒多	良好	にぶい橙色	
12	土師器高坏	玄門	(10.2)	—	(2.9)	ケズリ・ナデ	ハケ	砂粒多	良好	橙色	
13	土師器坏	玄門	—	(14.0)	(4.3)	ナデ	ナデ・底部ヘラケズリ	密	良好	橙色	内面に暗文
14	須恵器高坏	玄門	(10.0)	—	(4.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒多	不良	灰色	二方向の透かし孔有り
15	須恵器高坏？	玄室	(15.0)	—	(4.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	密	良好	灰色	

※（　）は復元径

かってラッパ状に開く。14は須恵器高坏の脚部。短脚で二方向の透かしを施す。15は須恵器壺ないしは高坏の脚部かとみられ脚端部は屈曲する。小片のため復元径に若干の疑問がある。

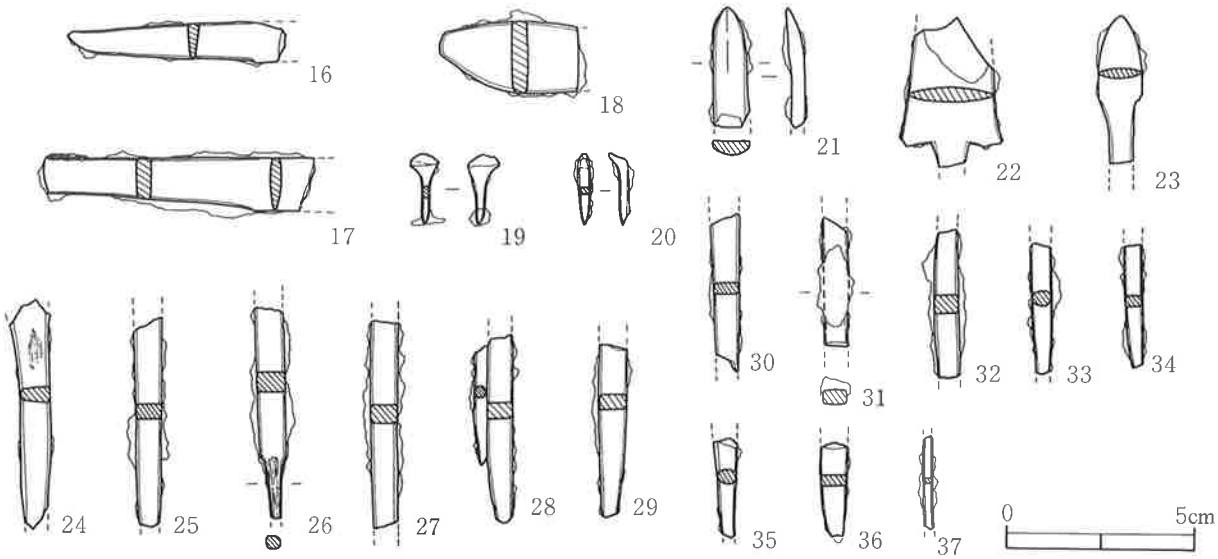
2．鉄製品

鉄製品は全て石室内から出土し、そのうちの大部分が玄室内のものである。

16と17は刀子で、いずれも身部を欠損する。両者とも関部が不明瞭で、茎と身部の境界が分かりにくい。16は残存長5.8㎝、幅1.1㎝、厚さ0.3㎝、17は残存長7.1㎝、幅1.0㎝、厚さ0.6㎝を測る。18は刀子の茎部分であるとみられるが判然としない。 残存長3.7㎝、幅1.9㎝、厚さ0.4㎝を測る。19は鋲金具。鋲頭は半円形を呈し、先端部は鋭く尖っている。全長1.9㎝で鋲頭部の幅は0.7㎝、厚さ0.9㎝、身部は幅・厚さとも0.3㎝を測る。20は鉄釘である。全長1.9㎝、幅0.3㎝、厚さ0.2㎝を測る。頭部が折れ曲がっている。21は鉈である。刃部のみが残存し、断面は若干内湾する形態であり、弱い稜線が表面に認められる。残存長3.2㎝、幅0.9㎝、厚さ0.4㎝を測る。

22～36は鉄鏃。22・23は鏃身部であり、22は腸抉柳葉形で鋒部が欠損する。23は柳葉形を呈する。24・25・27～32は頸部（箙被部）である。24は木質が若干残存しており、28は別個体の茎部が付着している。26は頸部から茎部までが残存しており、茎部には木質が付着している。33～36は茎部であるが36のように頸部との判別がつきにくいものもある。

37は針ではないかと考えられる。残存長2.5㎝、幅0.3㎝、厚さ0.2㎝を測る。



第11図　出土遺物実測図（2）

第2表　出土鉄鏃計測表　（単位は㎝）

挿図図版番号	出土地点	全長	身部 全長	身部 幅	身部 長さ	身部 幅	長さ	幅	備考
22	玄門	(3.9)	(3.4)	2.8	－	－	－	－	腸抉柳葉式
23	**玄室**	(3.9)	2.2	1.2	－	－	－	－	柳葉式
24	玄室	(6.1)	－	－	(6.1)	1.0	－	－	
25	**玄室**	**(5.5)**	－	－	**(5.5)**	0.7	－	－	
26	玄室	(5.6)	－	－	(3.9)	0.8	(1.7)	(0.3)	
27	玄室	(5.5)	－	－	(5.5)	0.7	－	－	
28	玄室	(5.0)	－	－	(5.0)	0.7	－	－	別個体が付着
29	玄門	**(4.6)**	－	－	(4.6)	0.7	－	－	
30	玄室	**(4.2)**	－	－	**(4.2)**	0.7	－	－	
31	玄室	(3.5)	－	－	(3.5)	0.6	－	－	
32	玄室	(4.0)	－	－	(4.0)	0.6	－	－	
33	**玄室**	**(3.5)**	－	－	－	－	(3.5)	0.5	
34	玄室	(3.3)	－	－	－	－	(3.3)	0.4	
35	玄室	(2.6)	－	－	－	－	**(2.6)**	0.5	
36	玄室	(2.5)	－	－	－	－	(2.5)	0.7	

※（　）は残存長

Ⅵ まとめ

臼田古墳は玖珂盆地の北縁で知られている古墳としては、唯一主体部をほぼ原型のまま現在に留めており、古墳時代後期の当該地域の古墳の形態を解明する上で貴重な資料を提供する古墳である。しかしながら、墳丘封土が畑の耕土として削り取られたり、風雨によって流失した結果、近年、石室の崩落の危険性が急速に高まったため、具体的な保存措置を講ずる必要が生じる状態となった。そのため、将来にわたっての保存と史跡としての整備のための基礎資料を得るために必要最小限度の範囲で実施されたのが、今回の発掘調査である。従って調査は、墳丘の形態・規模の確認、石室形態の正確な把握、古墳の築造時期につながる玄室内の遺物確認という３点に絞って行った。

以下、その３点を中心に結果をまとめたい。

まず、墳丘の形態・規模であるが、本文でも述べたとおり、墳丘のほとんどは失われており、外見から墳丘形態を推定する手がかりは全くない。しかしながら、合計４本設置したトレンチの土層観察から推定すると、直径９ｍ程度の円墳としておきたい。なお、東トレンチで確認した周溝の最底部と残存する墳丘最上部の比高差が約2.7ｍであることから、築造時の墳丘の高さは４ｍ前後であったと思われ、墳丘径が小さめなことから、墳丘の傾斜はかなりのものであったとみられる。

石室形態は、調査当初は片袖の可能性も考えられていたが、調査の結果、単室両袖の横穴式石室であることが判明した。玄室の平面プランはやや縦長の長方形で、最大幅2.3ｍ、長さ４ｍ程度、高さは奥壁側で2.7ｍを測った。古墳時代後期の大型の横穴式石室としては、後井１号墳（田布施町、片袖単室、玄室幅3.4ｍ、玄室長６ｍ、玄室高3.5ｍ）が著名だが、これは熊毛の国造の系譜に連なる巨石古墳であることから、比較の対象にはなりにくい。そこで、場所は離れるが、近年調査された県西部を代表する大型石室を有する大浦古墳群（山口市）の首長墓である４号墳（両袖単室、玄室幅2.2ｍ、玄室長3.4ｍ、玄室高不明）と比べると、石室規模はそれを上回っており、県内でも有数の規模の石室といってよい。なお、羨道部が破壊されているため石室長は不明だが、平面プランが極めて類似する近接する北方古墳が7.5ｍであることから、それと同程度と推定される。

築造時期については、玄室が開口していることから予想していたとおり、出土遺物は極めて少なく、時期を特定できる資料は十分ではない。しかし、玄門部から出土した完形に近い須恵器の坏身（9）と玄門と玄室から出土した須恵器坏蓋（８・10）から見て、６世紀後半代に築造されたものと考えたい。なお、東トレンチからは弥生時代後期の壺（1）が出土している。おそらく、臼田古墳の築造より以前に、弥生時代の遺構があったとものと思われる。

今回の調査で、臼田古墳は古墳時代後期の横穴式石室では、県内有数の規模を持つ貴重な古墳であることが判明した。さらに、古墳時代終末期には群集墳の形態をとることが多いのに対し、臼田古墳は現在のところ単独墳と思われ、おそらく玖西盆地の有力者を被葬者とするものと思われる。ただ、立地的には、盆地を望む丘陵の背後に築造されており、通常の立地条件からするとやや奇異な感じは否めないことと、周防地域の後期古墳の多くが、片袖もしくは無袖の石室を主体部とするのに対し、両袖であること、また玄室内には他に類例がない石列が検出されたことなど、今後解明しなければならない点があることも指摘しておきたい。

山口県玖珂町臼田古墳出土の人骨

松下孝幸*

キーワード：山口県、古墳時代人骨、横穴式石室、女性、保存不良

はじめに

山口県玖珂町臼田に所在する臼田古墳の発掘調査が、2000年(平成12年)の2月におこなわれ、横穴式石室から人骨が検出された。この古墳はすでに石室が開口して、攪乱などを受けており、出土した人骨は大腿骨頭が1個にすぎない。

山口県東部地区では、玖珂町では筏山古墳から保存良好な男性人骨1体が出土しており、平生町の神花山古墳からも保存良好な女性人骨1体が出土している。山口県では県西部地域よりも東部地域での方が人骨の残りがいいようであるが、今回は大腿骨頭1個しか残存していなかった。

資料・所見

石室内から検出されたのは大腿骨頭1個のみである。大腿骨頭は皮質が薄く、ほとんどが海面質から構成されているので、通常ではなかなか残らない部分である。この残りにくい部分が残っていることから想像して、本来人骨の保存状態はよかったものと思われるが、盗掘や攪乱によって人骨の他の部分は失われたものと思われる。

この大腿骨は考古学的所見から、6世紀後半から7世紀初め(古墳時代後期)に属する人骨と推定されている。

残存していた大腿骨頭は完全ではないので、左右の区別がつかない。計測はできないが、径は小さい。

大腿骨頭の径の大きさから性別を推定すれば、本例は径が小さいので、女性としておきたい。年齢は不明である。

謝辞

擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた山口県埋蔵文化財センターの諸先生方に感謝致します。

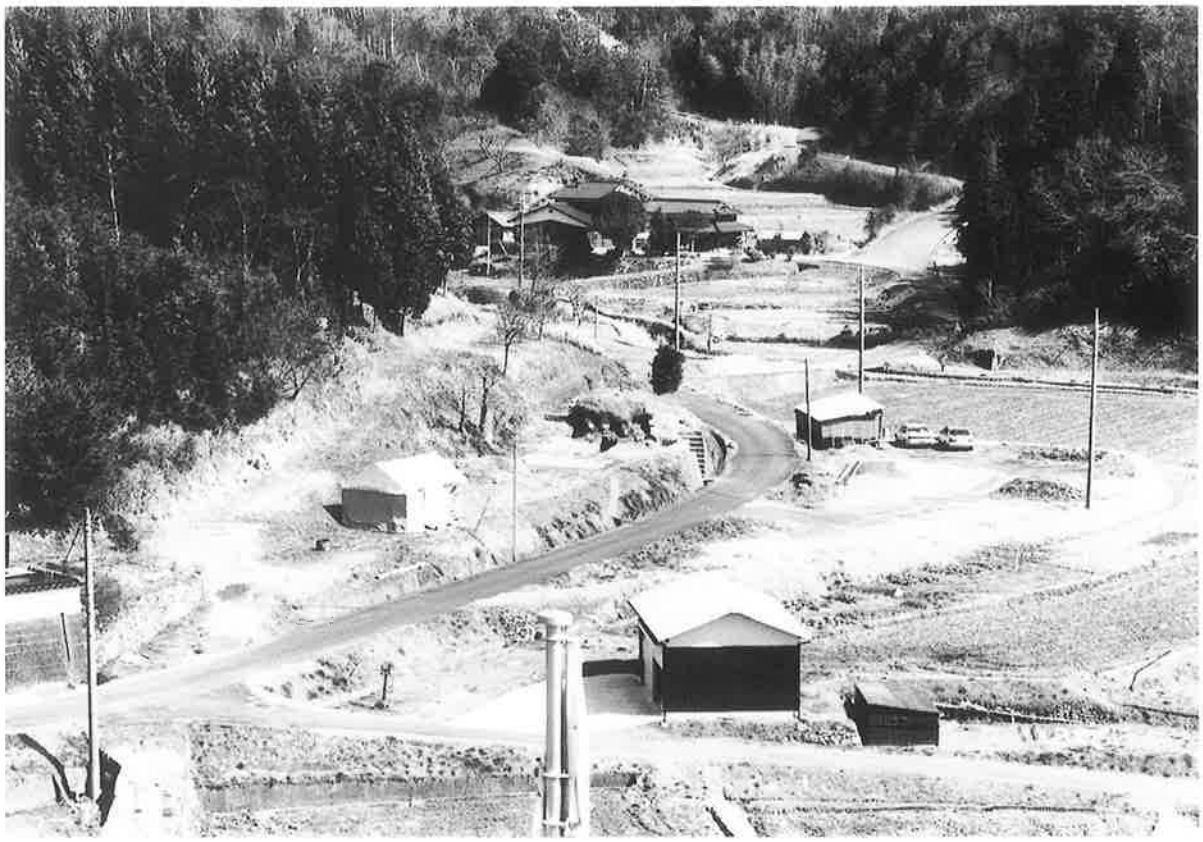
《参考文献》

1．鈴木誠・他、1951：山口県熊毛郡神花山古墳人骨。人類誌、62：31-33.

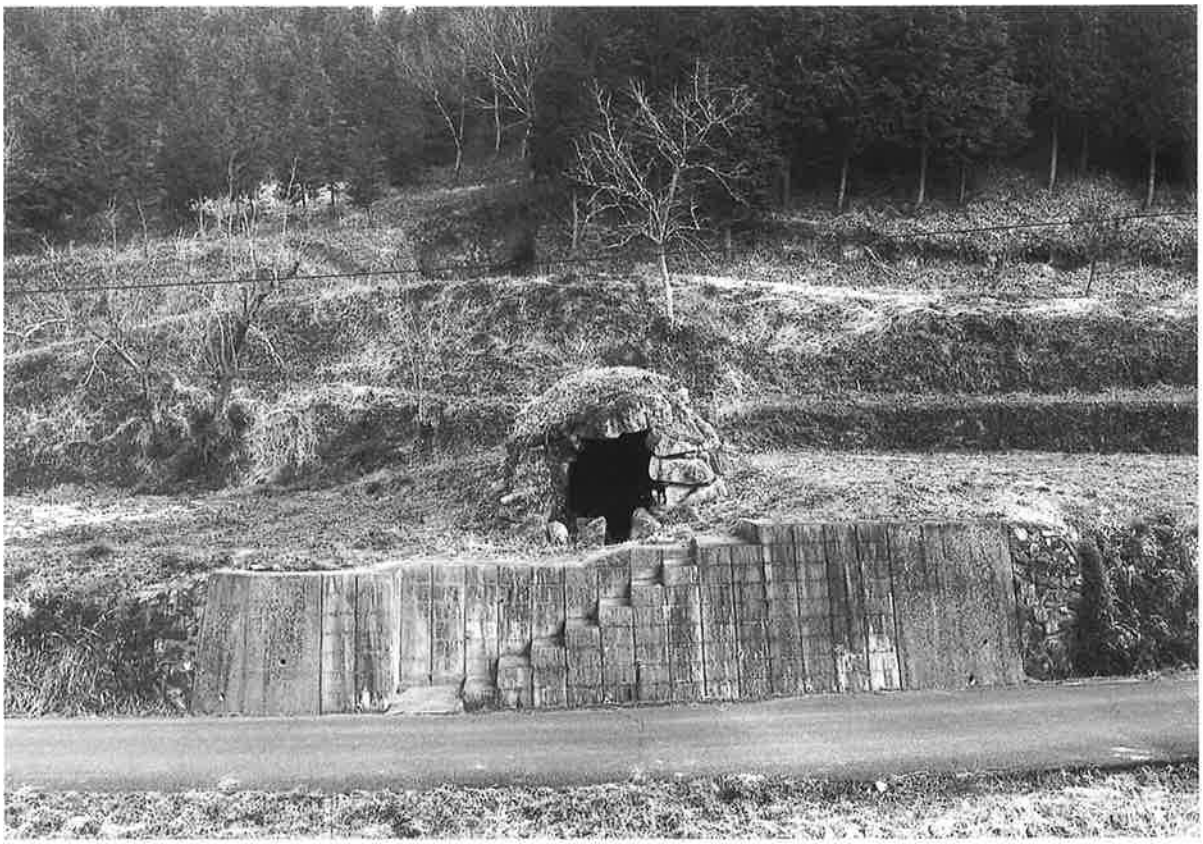
2．松下孝幸、1985：光市荒神山古墳出土の人骨。光地方史研究、第11号：60-66.

3．松下孝幸・他、1983：山口県山口市朝田墳墓群第Ⅱ地区出土の人骨－総括篇－。朝田墳墓群Ⅵ(山口県埋蔵文化財調査報告69)：219－242.

＊ Takayuki MATSUSHITA
The Doigahama Site Anthropological Museum〔土井ケ浜遺跡・人類学ミュージアム〕



臼田古墳遠景（西より）

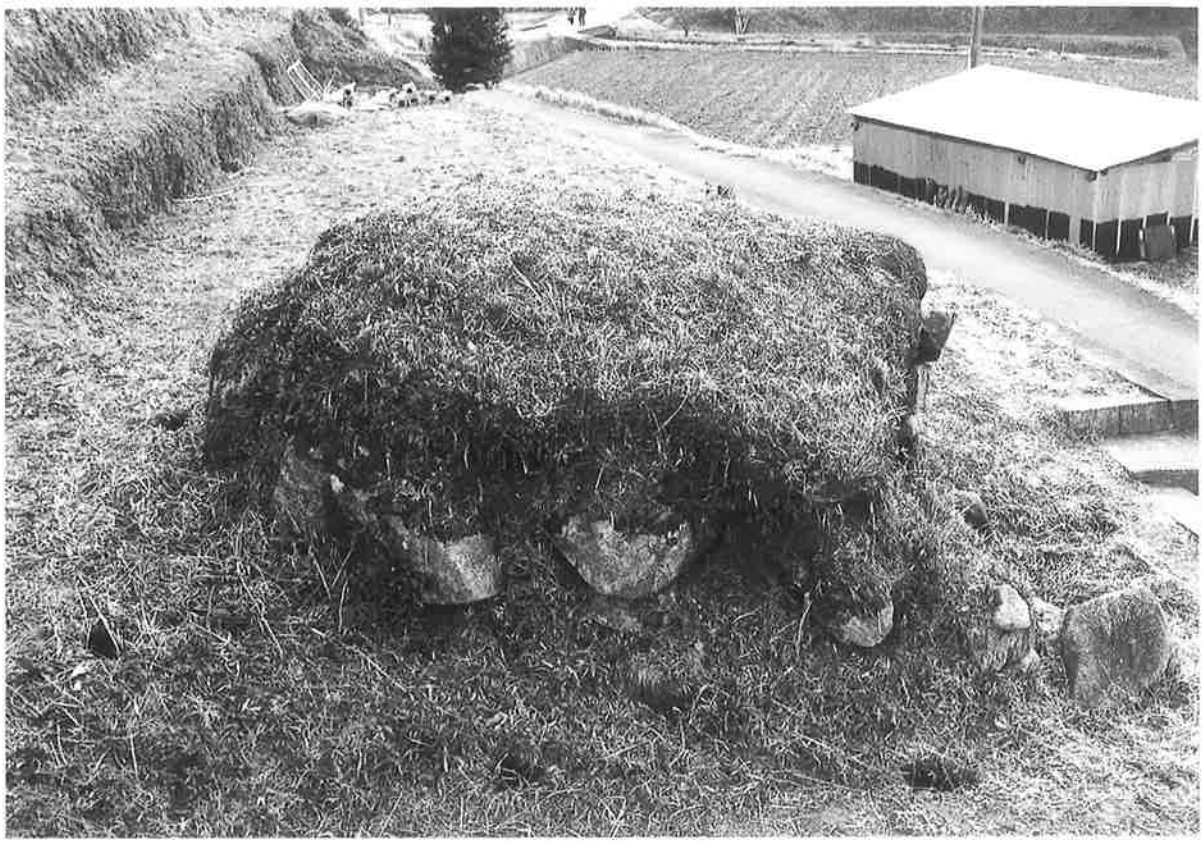


調査前（南より）

図版 2

調査前近景（南より）

調査前近景（東より）



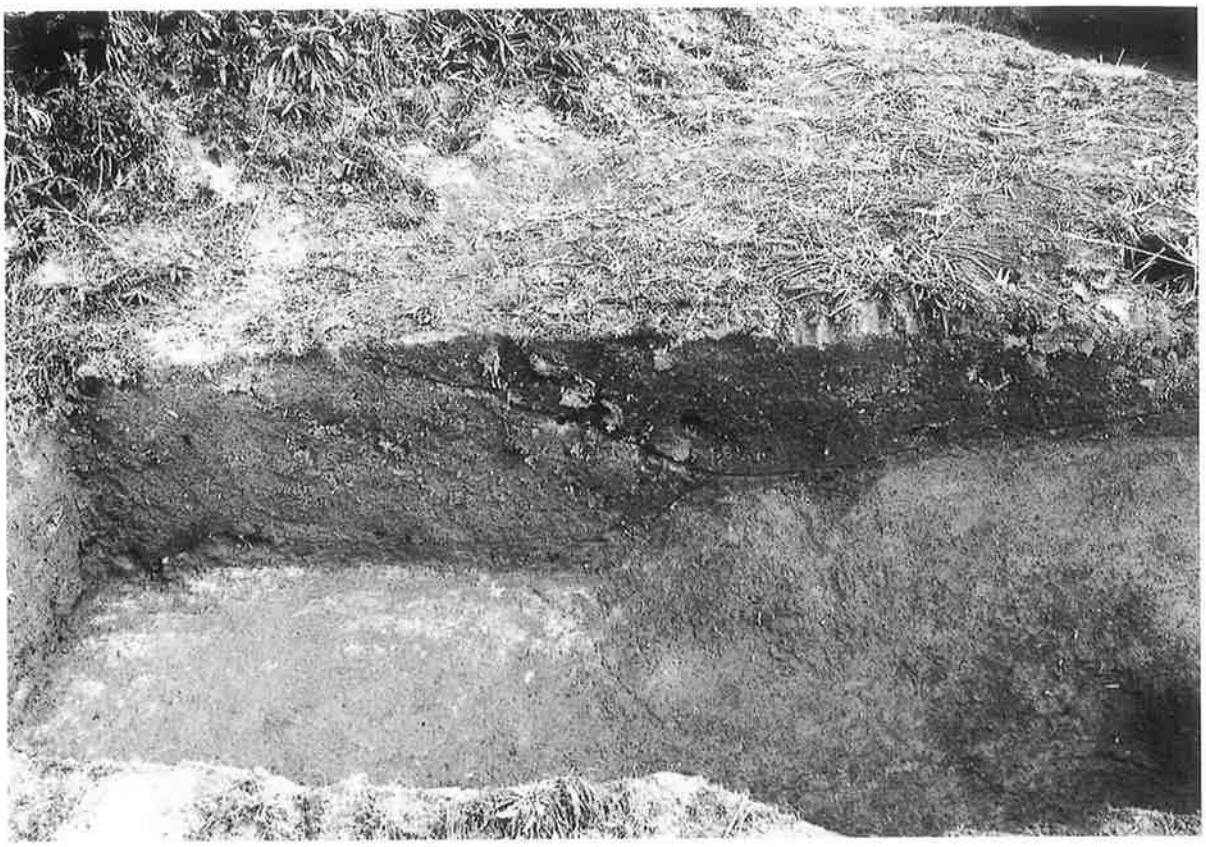
調査前近景（西より）

トレンチ配置状況（北より）

図版 4

東トレンチ石室掘り方検出状況（北より）

東トレンチ周溝部土層断面（北より）



北西トレンチ墳丘裾部検出状況（西より）

北トレンチ石室掘り方検出状況（北より）

図版 6

玄室奥壁

玄室右壁

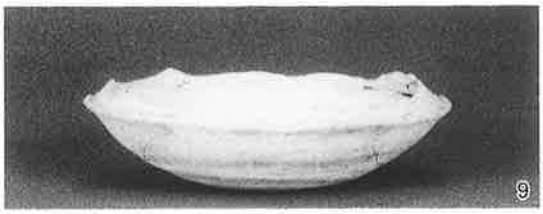
玄室左壁

玄門部

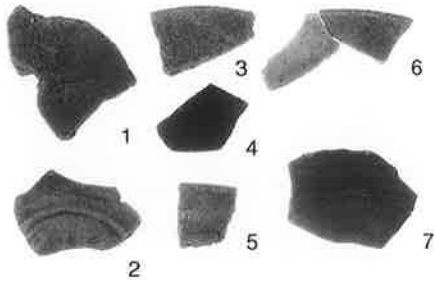
図版 8

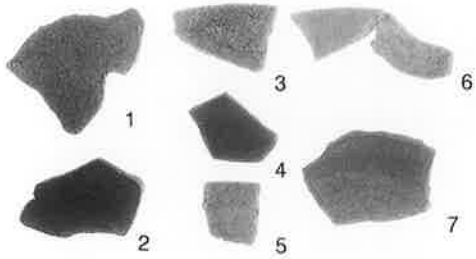
羨道閉塞検出状況（西より）

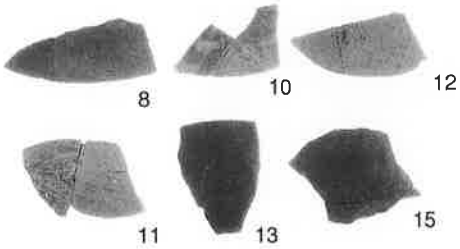
玄室内石列（奥壁側より）

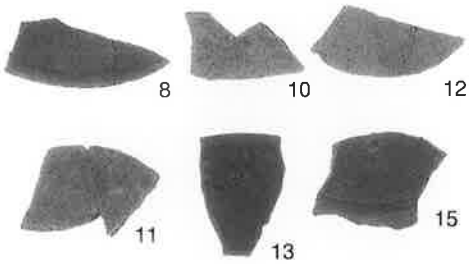

9

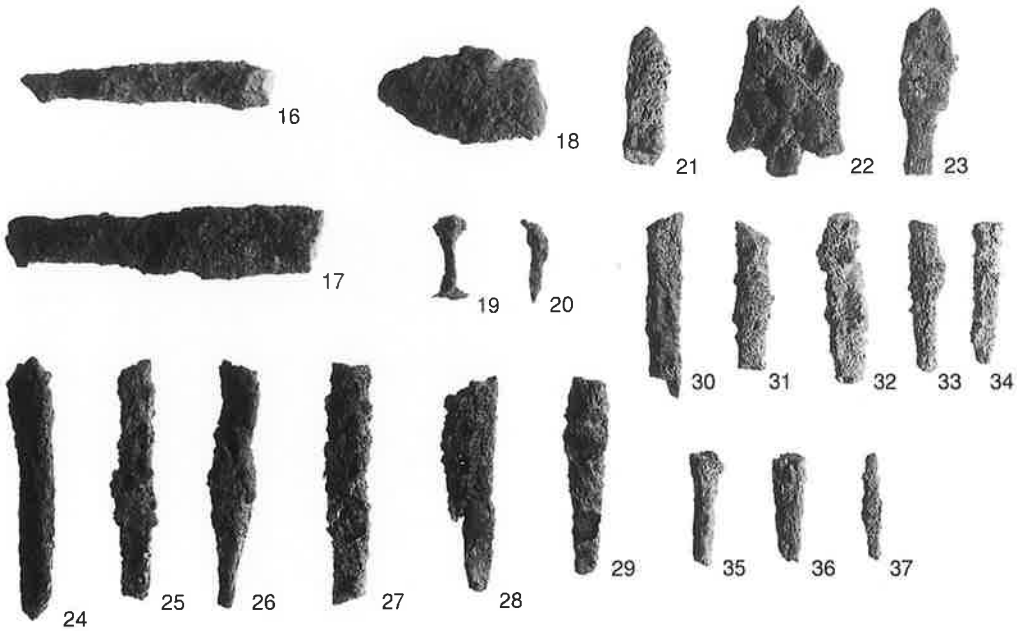
14


1
2
3
4
5
6
7


1
2
3
4
5
6
7


8
10
12
11
13
15


8
10
12
11
13
15


16
18
21
22
23
17
19
20
30
31
32
33
34
24
25
26
27
28
29
35
36
37

出土遺物

報告書抄録

ふりがな	うすだ　こふん
書名	臼田古墳
副書名	
巻次	
シリーズ名	玖珂町埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第4集
編集著者名	大村秀典　　小南裕一
編集機関	財団法人山口県教育財団　　山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073　山口県山口市春日町3番22号　TEL083-923-1060
発行年月日	西暦2001年3月23日（平成13年3月23日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
臼田古墳（うすだこふん）	山口県玖珂郡（やまぐちけんくがぐん） 玖珂町（くがちょう） 字臼田（あざうすだ）	35323		34°5′56″	132°3′50″	000221 ～ 000308	31.4	史跡整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
臼田古墳	古墳	古墳時代	円墳1基	弥生土器 須恵器 土師器 鉄製品	古墳時代後期としては県内有数の石室規模を持つ。

玖珂町埋蔵文化財調査報告　第４集

臼　田　古　墳

２００１年３月

編　集　山口県埋蔵文化財センター

発　行　玖珂町教育委員会

印　刷　泉菊印刷株式会社